



## 隅田川沿いの 寺社建築

隅田川沿いには長い歴史を持つた寺社がいくつもあります。そこに建つ仏堂社殿には戦前に建てられたものがあり、良い風情を生み出しています。今回はこれら建物を見ていきたいと思います。

出発は牛嶋神社（向島一丁目4-5）です。貞観年間（859-79）の創建と伝えられる古社で、本所の総鎮守として知られます。関東大震災によって大きな被害を受け、復興にあたって昭和7年（1932）に少し北の地から現在地へと移り、現社殿が建てられました。正面五間の拝殿は、入母屋造の屋根に千



牛嶋神社

鳥破風を付け、手前に張り出した向拝の屋根を唐破風としており、柱上の組物や獅子・龍の彫刻、飾金物とも合わさって華麗で堂々とした様子を見せています。拝殿の後ろには本殿があり、両者を弊殿がつなぎます。本殿には拝殿よりも立派な組物と彫刻があり、神様を祀る建物としての格を示しています。

牛嶋神社を抜けて見番通りを北東へ進み、すみだ郷土文化資料館を越えて歩いて行くと、左手に三囲神社（向島二丁目17）が見えてきます。三囲神社社殿は文久2年（1862）に造営され、明治17年（1884）の修理を経た建物で、江戸時代の姿を伝えています。質素で穏やかな印象の建物で、瓦屋根の力強い張りりと向拝部分に施された獅子、仙人と童子、鳳凰などの彫刻が特徴的です。本殿

屋根の留蓋瓦は狐となっていて、お稲荷様を祀っていることを示しています。

境内の北西には顕名霊社があります。この神社は、もとは三井家の邸内にあつた同家の祖霊社で、平成6年（1994）に三囲神社へ移されました。建物は小振りな一間社流造ですが、正面に千鳥破風と唐破風を付ける屋根は大きく立派です。また部材に施された絵様、壁面に嵌められた精緻な彫刻、柱上の組物と縁側の下の組物（腰組）が華やかな印象を与えます。彫刻は下絵を日本画家・川端玉章が描いたと伝えられ、彫り上げた大工の腕も確かで、見応え十分です。近代の社殿ですが、江戸時代以来の優れた技術で造られた建物です。

三囲神社を後にしてさらに進むと弘福寺（向島五丁目2）の山門が見えてきます。正面から見ると凸形となっている門は、



顕名霊社の彫刻（三囲神社内）

黄檗宗の寺院でよく見られる形式で、太い梁と鯨瓦を載せた瓦屋根が重厚な雰囲気を出しています。門をくぐった正面に見える二層の大きな建物が大雄宝殿で、建物手前の月台（基壇上の平坦な場所）や、正面に掛けられた聯額、建具形式などは一般的な黄檗宗建築の特徴を見せています。一方で、この建物は二層の堂の後ろに単層の堂が丁字形になるように付いた独特な形をしています。これは、仏様を祀る壇を後ろの堂に置くことで、前の堂に礼拝のための空間を広くとる工夫と考えられます。黄檗宗特有の意匠を用いながら、機能を求めた近代的な仏堂といえるでしょう。境内には他にも鐘楼と客殿があり、山門、大雄宝殿と同じ昭和8年（1933）の竣工です。主要な建物が同時に計画されたため、境内には良い統一感が生じています。

弘福寺の裏側にまわり、墨堤を言問橋に向かって歩けば、大雄宝殿の背面や三囲神社の堤下の大鳥居などを見ることが出来ます。盛夏に向かって緑を濃くしていく木々の下を通りながら、建築散歩を試みてはいかがでしょうか。

（墨田区文化財調査員

米澤 貴紀）

# すみだゆかりの近代落語家

## 三遊亭圓朝

恵泉女学園大学講師・演芸評論家 瀧口 雅仁



近代落語の祖・三遊亭圓朝

すみだは落語と大変にかかわり合いの深い地です。落語が生まれ、落語を世に広めたともいえるのが、ここすみだの土地だからです。

落語の歴史は三百年ともそれ以上とも言われ、江戸落語は江戸の初期に鹿野武左衛門により興されました。しかしその落語も、馬の物言い事件という舌禍事件に巻き込まれ、一度は途絶えてしまいました。

そして、その落語を江戸後期に再興したのが、本所相生町に生まれた大工の烏亭焉馬（立川焉馬とも）で、当時の文化人達を集めて「咄の会」という落語会を開いたのが、向島の料亭武蔵屋でした。武蔵屋は現存しませんが、その並びの秋葉神社は今も建っています。その焉馬が種まきをした落語を、明治期に満開の花として咲かせた巨星の一人が、すみだに暮らした三遊亭圓朝でした。更にその圓朝の流れをくみ、昭和の名人と言われた古今亭志ん生が貧乏時代を送り、売れっ子になる頃まで暮らしたのが、本所業平の「なめくじ長屋」でした。

中でも、「近代落語の祖」と

呼ばれ、今では落語界の神様の存在である三遊亭圓朝には、今一度注目しない訳にはいきません。62年の人生の中の38歳から57歳まで、まさに落語家としての壮年期を過ごしたのが本所南二葉町（現在の亀沢2丁目周辺）だったからです。

江戸湯島に生まれた圓朝が、落語家入門したのは7歳の時。そして26歳で真打に昇進した際に、披露目を行ったのが、両国橋の東詰にあった「垢離場」という寄席でした。

多くの門人を抱えた圓朝は南二葉町の地に五百坪という広大な屋敷を設けて暮らしました。

その前後のことですが、圓朝が『怪談百物語』の創作のために題材を探していたところ、本所堅川の塩原家に伝わる怪談話を伝え聞きます。必要とあらば現地に赴き、資料調査を欠かさなかった圓朝は、調べを行っていく内に塩原太助という人の出世話にたどり着きます。そして当時の社会情勢と照らし合わせてみた時に、そちらに視点を当



明治時代の教科書にも採用された「塩原多助」



木母寺境内に建つ「三遊塚」

てた方がいいと考えたのか。そうして作られたのが、『塩原多助一代記』という立身出世噺でした（ちなみに落語では「多助」と記します）。

また、歌舞伎や映画でもおなじみの怪談物である『真景累ヶ淵』や『怪談牡丹灯籠』の作者としても知られる圓朝ですが、やはり代表作の一つである『怪談乳房榎』を創作したのも、モーターパッサンの「親殺し」にヒントを得たという長編噺『名人長二』を生み出したのも、本所の地でした。

圓朝とすみだの地は他にも少なからず関係を持っています。堤通の木母寺境内に「三遊塚」を建てたのも圓朝です。圓朝は自らが筆頭にある「三遊派」の復興を願い、圓朝の師匠であり、既に故人となっていた二代目圓生にそれを誓って、この碑を建てました。碑の前面の文字は、圓朝がもう一方で師と仰いだ山岡鉄舟揮毫によるものです（それに対抗するように、柳島妙見堂には「柳塚」が建っています）。さて、多くの作品と資料を残した圓朝ですが、以前より気が

なっていた件がありました。圓朝の暮らした地が、これまで建てられていた「旧居跡の地碑」と若干異なるのです。

圓朝が残した住所が記されている書簡や圓朝の周辺にいた人の証言、そして当時の屋敷の平面図や地図等々の調査と再検証を始める、どうやらそれまで旧居跡とされていた位置よりも、西に向かって通り一本異なることが分かりました。

現在は圓朝の住居の北側にあたる「亀沢第一児童遊園」内にその史跡説明板が建っています。ここ数年、落語に再び光があたっていることもあり、また神様の存在でもある圓朝がすみだの地に暮らしたとなれば、今後注目されることは必須です。今回こうして、圓朝旧居跡を知らせる説明板が移されたのは喜ばしいことであり、すみだに暮らし、演芸研究に携わる私としても誇らしいことと思っています。話題の東京スカイツリー®の周辺には、焉馬、圓朝、志ん生（今回、圓朝が真打の披露目をした寄席「垢離場」と、志ん生が暮らした場所も特定出来ました）、そして「野ざらしの柳好」とか「向島の柳好」と呼ばれて人気を得た三代目春風亭柳好といった、落語史、ひいては日本の文化の一端を担った落語家が暮らしていました。他にもすみだを舞台にしている落語も多いので、これを機に改めて落語に注目してみたいかがでしょうか。